



## 👁️👁️ みどころ

アメリカでは、『大統領の陰謀』(76年)、『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』(17年)等の記者たちを主人公にした名作が多い。また、『13デイズ』(00年)、『バイス』(18年)等、大統領や副大統領を主人公にした名作も多い。さらに、「9.11テロ」「アフガン戦争」「イラク戦争」を描く名作も多い。しかし、本作の「記者たち」とは、どこの記者？

それは、9.11テロ直後、愛国主義が燃えさかる国内で、NY・タイムズやW・ポストをはじめとする大手メディアがフェイクニュースに染まる中、一社のみ真実の報道に情熱を傾けたナイト・リッター社の記者たちだ。

9.11テロの首謀者ウサマ・ビンラディンとフセイン大統領が支配するイラクが繋がっているうえ、イラクは大量破壊兵器を持っている。これが、「イラク開戦」の根拠だが、それがフェイクニュースだとしたら・・・？

少しネタは古いし、少しカッコよすぎる面もあるが、やはりこの手の映画は貴重だ。しかも、今回はブッシュ大統領を傀儡のように動かしていたチェニー副大統領を描いた『バイス』と同じ日に本作を鑑賞できたことに感謝！両作を対比すれば、そりゃ面白いよ・・・。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■彼らはどこの記者？原題は？■□■

「記者たち」というメインの邦題だけでは、どこの新聞社の記者たちかサッパリわからない。彼らはどこの記者？そして、本作のテーマはナニ？

「記者たち」を主人公にした問題提起作は多い。古くはニクソン政権下におけるウォー

ターゲット事件を暴いたワシントン・ポスト紙の2人の記者たちを主人公にした『大統領の陰謀』（76年）が有名だ。近時、ボストンのゲーガンという神父が、30年の間に80人もの児童に性的虐待を加えたという「ゲーガン事件」を「深掘り」し、公表したポストン・グローブ紙の記者たちを主人公にした『スポットライト 世紀のスcoop』（15年）（『シネマ38』48頁）や、ペンタゴン・ペーパー事件を徹底的に追及するワシントン・ポスト紙の記者たちの活躍を描いた『ペンタゴン・ペーパーズ 最高機密文書』（17年）（『シネマ41』37頁）等の名作がある。

しかして、本作の「記者たち」とは、ナイト・リッター社の記者であるジョナサン・ランデー（ウディ・ハレルソン）とウォーレン・ストロベル（ジェームズ・マースデン）の2人だが、「KNIGHT RIDDER」って一体ナニ？これは31紙の地方新聞を参加に持ち、ナイト・リッターの記事を31紙で自由に掲載できる会社だそうだが、ニューヨーク・タイムズ紙やワシントン・ポスト紙は知っていても、ナイト・リッター社を知っている日本人は皆無だろう（ちなみに、このナイト・リッター社は2006年に大手新聞チェーン「マクラッチー」に買収されたらしい）。過去『恋人たちの予感』（89年）や『最高の人生の見つけ方』（07年）（『シネマ20』329頁）等のヒット作で有名なロブ・ライナー監督が、なぜそんな名もない小さな新聞社の「記者たち」を主人公にした本作を撮ったの？

ちなみに、本作の原題は「SHOCK AND AWE」で、AWEとは畏怖のこと。そのため、邦題にも「衝撃と畏怖の真実」というサブタイトルを付けたわけだが、これは同時にイラクへの軍事作戦名でもある。もっとも、この邦題だけでは、どこの記者たちの、何をテーマにした映画かサッパリわからないが・・・。

## ■9・11同時多発テロとアフガン戦争を描く映画は？■

2001年9月11日に発生した世界同時多発テロを描く映画は、①『ユナイテッド93』（06年）（『シネマ12』29頁）、②『ワールド・トレード・センター』（06年）（『シネマ12』35頁）、③『ナインイレブン 運命を分けた日』（17年）（『シネマ40』未掲載）、④マイケル・ムーア監督の『華氏911』（04年）（『シネマ6』124頁）、等たくさんある。

「9・11世界同時多発テロ」の首謀者は、テロ組織アルカイダの指導者であるウサマ・ビンラディンだとされたため、アメリカは数度にわたる国連安保理決議に基づいて、アフガニスタンの9割を実効支配していたタリバン政権に対して、ウサマ・ビンラディンの引き渡しを要求したが、タリバンはそれを拒否。そのため、第43代米国大統領ジョージ・W・ブッシュは同年10月、イギリス・フランス・ドイツ・カナダ等と共同し、またアフガニスタンの北部同盟とも共同してアフガニスタンを攻撃し、短期間のうちにタリバンを制圧した。そして、12月22日にはハーミド・カルザイを議長とする暫定政府であるアフガニスタン暫定行政機構を成立させた。

この、アフガニスタン戦争を描く映画も、『ある愛の風景』（04年）（『シネマ16』70頁）、

『ある戦争』(15年)、『シネマ 39』106頁)、『大いなる陰謀』(07年)、『シネマ 19』250頁)、『ホース・ソルジャー』(18年)、『シネマ 42』96頁)、『ミッション：8ミニッツ』(11年)、『シネマ 27』148頁)、『ローン・サバイバー』(13年)、『シネマ 32』286頁)、等たくさんある。

## ■□■イラク戦争を描く映画は？大量破壊兵器は？■□■

さらに、その後2003年3月にブッシュ大統領はサダム・フセイン大統領が支配するイラクに対する開戦に踏み切ったが、そのイラク戦争を描く映画も、『アメリカン・スナイパー』(14年)、『シネマ 35』24頁)、『イラク 狼の谷』(06年)、『シネマ 16』218頁)、『告発のとき』(07年)、『シネマ 19』260頁)、『さよなら。いつかわかること』(07年)、『シネマ 19』255頁)、『30年後の同窓会』(17年)、『シネマ 42』未掲載)、『ハート・ロッカー』(08年)、『シネマ 24』15頁)、等たくさんある。また、ウサマ・ビンラディンの殺害計画を実行に移したものすごい映画が、女流監督キャスリン・ビグローの『ゼロ・ダーク・サーティ』(12年)だった(『シネマ 30』35頁)。

ブッシュ大統領がイラク戦争を決意したのは、サダム・フセイン大統領が支配するイラクはウサマ・ビンラディンと繋がるテロ支援国家であるうえ、イラクは大量破壊兵器を保有していると断定したためだ。ところが、ニューヨーク・タイムズやワシントン・ポストをはじめとするアメリカのほとんどのマスコミはそのニュースを大々的に流し、アメリカ国民も大多数がイラク開戦を支持したにもかかわらず、後にイラクに大量破壊兵器は発見されなかったから、アレレ……。すると、2003年3月のイラク開戦の理由の第1に掲げた、「サダム・フセイン大統領が支配するイラクは大量破壊兵器を保持するテロ支援国家である」はフェイクニュースだったの……。？本作の「記者たち」とは、大手メディアが軒並みブッシュ政権がまき散らすフェイクニュースに迎合する中、たった1社だけそれに疑いを持ち、世の中に真実を伝えることに執念を燃やしたナイト・リッター社の記者たちのことだ。

## ■□■なぜナイト・リッター社だけが批判的記事を？■□■

かつて私たちの両親の世代、太平洋戦争中の日本人は、ほとんどすべてが大本営発表の(フェイク)ニュースを信じ続けていた。今は政権批判に躍起になっている朝日新聞も、その報道のお先棒を担いでいたことは歴史上あきらかだ。新聞記者は自分の足で取材して真実の報道を目指すのが仕事だから、一般国民より情報源に近いところにいるのは当然だが、その記者が大本営から流される情報を鵜呑みにし、そのまま新聞に載せ、ラジオで伝えたのでは取材と言えないことは明らかだ。

9. 11テロ直後のアメリカでは、愛国的言辭一色に染まる異様な雰囲気の中、「米国愛国者法 (USA Patriot Act)」を成立させた。ちなみに、先日、前後編2回に渡ってテレビ

放映されたドラマ『二つの祖国』では、日本軍が真珠湾攻撃を敢行した後の、日系2世たちの苦悩をリアルに描いていた。それと同じように、9.11テロの後にはアメリカ国内の中東系移民たちの立場が一斉に苦しくなったのは当然だ。ジョナサンとウォーレン2人の記者たちの情報源は国務省、国防総省、上院職員、行政官、中東専門家、安全保障専門家、etc、でこれは大手メディア記者たちと同じ。情報を正しく伝えることを信念とするナイト・リッター社の支局長ジョン・ウォルコット（ロブ・ライナー）も、それは同じだ。ところが、NY・タイムズやW・ポスト等の大手メディアが軒並みイラク開戦に突き進む政府の方針に迎合する中、ウォルコットだけはそれに真っ向から対立する批判記事を発表し続けていた。しかし、愛国一色に染まった米国の中で政府に批判的な記事を流すナイト・リッター社の記事は評判が悪かったらしく、傘下の新聞社からは記事の掲載を拒否され、売り上げが激変していったから大変。そんな中でも、ウォルコットは大量破壊兵器の存在を疑問視し、「他のメディアが政府の広報に成り下がるなら、やらせておけばいい。我々は、我が子を戦争にやる者たちの味方なのだ」と熱弁をふるって部下たちを激励したから偉い。

監督だけでなく俳優としても活躍しているロブ・ライナーがこのウォルコット役で登場し、何とも骨太のカッコいい役を演じているが、ちょっと理想的すぎる感も……。また、ウォルコットが取材体制を強化するために招聘した元従軍記者ジョー・ギャロウェイを演じるトミー・リー・ジョーンズは、ソフトバンクのコマーシャルでもお馴染みだが、本作では何ともカッコいいジャーナリスト役を！

## ■□■ 2人の記者の妻は？恋人は？彼女らの協力は？ ■□■

本作はアメリカがフェイクニュースに踊りながらイラク開戦に踏み出す中、ただ一社だけ信念を貫き、真実の報道に命を燃やした「記者たち」を主人公にした、いわゆる“ワンイシュー”映画。したがって、ヘソ曲がりの私は、そんな映画こそが一方の立場のみを正しいと描くフェイク映画では？とつい考えてしまう。そんな観客がいることも想定した(?)ロブ・ライナー監督は描き方が一本調子になることを避けるため、元陸軍上等兵アダム・グリーンのお話を挿入している。アメリカが愛国心で燃え上がる中、彼は両親の反対を押し切って軍への志願を決意し戦地に赴いたが、足を負傷して帰還することに。本作冒頭は、そんな彼が上院の委員会では証言する晴れの日だが、車椅子に座ったまま彼はどんな証言を……？

さらに、本作では2人の記者たちが熱心さのあまり独断専行する危険を防ぐため(?)、ジョナサンの側には妻のヴラトカ・ランデー（ミラ・ジョヴォヴィッチ）を登場させている。そして、ウォーレンは独身だが、アパートの隣同士という関係から、リサ（ジェシカ・ビール）との間に恋心が生まれるというちょっとしたラブロマンスを入れながら、ウォーレンの記事をリサにチェックさせる役割をもたせている。「刑事もの」でも単独行動は少なく、2人1組で立ち向かうケースが多いが、本作もそれと同じパディもの。本作では、国

家安全保障担当のベテラン記者ジョナサンと、外交担当の年若い熱血漢ウォーレンの、バディとしての取材ぶりをじっくり観察したい。

## ■□■同じ日に同じテーマで2つの名作を！■□■

9. 11テロの惨状を伝えるニュース映像はこれまで何度もTVで見ているが、今回私は同じ日に同じテーマの2つの名作で、それを確認した。その1つが本作だが、もう1つは『バイス』(18年)だ。また、J・W・ブッシュ大統領がイラク開戦を伝えるニュースの映像も何度も見たが、それも本作と『バイス』の両方で確認した。

『バイス』とはバイス・プレジデント(副大統領)のことで、J・W・ブッシュ大統領の下で副大統領を務めたD・チェイニーを描いた面白い映画だった。彼の政治上の師匠はニクソン政権下で大統領補佐官を務めたこともあるラムズフェルドだが、ブッシュが大統領選挙に出馬するについて副大統領を要請されたチェイニーは、「どうやら君は動的なリーダーだ。物事を勘で決める。それなら私が平凡な任務を担当できるかもしれない」と提案し、それを受け入れさせることによって、官僚や軍、エネルギー政策から外交政策に至るまであらゆる実権を掌握したから、副大統領のチェイニーは大統領職をハイジャックしたような気分だったらしい。そのため彼は、9. 11事件直後、「遂に自分の実力の見せ場になった！」と張り切ったようで、ブッシュ大統領のイラク開戦宣言はすべてチェイニーの演出だったらしい。すると、「ウサマ・ビンラディンと繋がっているサダム・フセイン大統領が支配するイラクは大量破壊兵器を持っている」という(フェイク)ニュースも、実はチェイニーが仕掛けたもの・・・？もっとも、ボソボソとしかしゃべらないチェイニーは秘密主義を徹底させていたから、その実像には容易に迫れないそうだが、そんな「実態」は『バイス』を観ればよく理解できる。

すると、本作の「記者たち」が9. 11後の情勢を分析し、イラク開戦に向けてフェイクニュース蔓延する中で真実を報道するためには、そんなチェイニー副大統領に対する取材が不可欠だが、その点、本作は・・・？ 2019(平成31)年4月19日記